

クラス番号	618	担当教員名	岡崎 浩
テーマ	フィクションをとおして「ふくし」を考える		
著書・論文 研究課題等	著書：『読み解かれる異文化』松柏社、1999 年(共著)、『『アメリカの悲劇』の現在』中央大学出版部、2002 年(共 著)、『問い直す異文化理解』松柏社、2007 年(共著)、『ウィリアム・スタイロンの世界』中央大学出版部、2008 年(共著)、『文学・労働・アメリカ』南雲堂フェニックス、2010 年(共著) 主要論文：「ソール・ベローの『宙ぶらりんの男』と気力の喪失」『現代と文化』第 117 号(日本福祉大学福祉社会開発研究所紀要)、「悲劇的共同体とその悲劇——アーサー・ミラーの『みんな我が息子』を読む——」 『New Perspective』第 189 号 (新英米文 学会学会誌)「『成功の夢』悲劇の書き換え——『オーギー・マーチの冒険』第 12 章を読む——」『New Perspective』 第 195 号(新英米文学会学会誌)		
ゼミナール概要			
キーワード：「ふくし」、物語、フィクション			
目的、内容、方法等： このゼミの最大の特徴は、4 年次の「卒論」を、卒業論文ではなく、卒業制作にできることです。具体的には、「ふくし」と関わるフィクション(=物語)を作ること、卒論の単位をとることが可能ということです。 ここで言う平仮名の「ふくし」というのは、2013 年 5 月 6 日の読売新聞に掲載された学長のインタビューを参照していただけるとよくわかると思います。学長によると、漢字の「福祉」には、生活保護や障がい者支援といった「特定のひとのためのもの」といったイメージがある一方で、平仮名の「ふくし」は、それも含んだ広い意味で、「人間らしく幸せに生きるため」のあらゆる活動を含む言葉です。この角度から見ると、このゼミの卒業制作では、ゼミ生なりの「幸せについての物語」が書ければいいことになります。 このゼミでは、「ふくし」についてのフィクション(=物語)が作れるよう、学生と教員が協力してゼミを進めます。具体的には、基本的には、小説を題材にして、ゼミを進めます。たとえば、ある小説からは、現場の実態を知ることができるかもしれませんが、個人が上手く生きる術も学べるかもしれません。そして、その気があれば、どうしたら上手に物語を作ることができるかも学ぶことができるでしょう(→また、たとえば、生きやすいコミュニティを作るためにはどうしたらいいかという問題についても、考えられるかもしれません)。過去 3 年間は新美南吉記念館の読書会に参加してきましたが、それとは異なる形での南吉作品との関わりの可能性もあります。文章を書く作業も行って表現力の強化も目指します。また、文学作品を朗読などの形式で読むことによ って、優れた文章のリズムや構成などを体感してもらいたいとも考えています。 主に上述のような作業を 3 年次に行い、4 年次には、卒業制作のフィクション(=物語)作りなどを行います。			
授業計画：◎ 3 年次前期は、計画に狂いがなければ『万寿子さんの庭』を題材に学んでいきます。3 年次夏に短い物語をいわゆる習作として書いてもらいます。後期は、文章を読む作業と書く作業が主ですが、短編小説を題材にする予定です。後期末には、夏休みに書いてもらった物語の合評会を行います（！！！！いい視点のゼミ生！！！！みなそうです）。4 年次は、卒業制作の作成が中心ですが、前期には、さらに短編を読んで、文章を書いて交流もします。			
担当教員からのメッセージ			
ゼミ生の学びは、＜自分次第＞、だと思います。 物語というフィクション形式のほうが大学で学んだことをよりよく表現できそうな学生のみなさん、また、レポートを拡大延長したものとも言える卒業論文が自分には書けないのではないかと不安を抱えている学生のみなさん、フィクション(=物語)作りで卒論の単位をとることに挑戦してみませんか。			